
雨の死神

鶲鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の死神

【Zマーク】

Z2926Z

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

雨の日に一人立っている少女。そんな所に幼い少年が傘を渡してくれた。

そして10年後…。

プロローグ

ある雨の日

。

「…誰も、僕の事を信じてくれない。」

雨の日

。

「…世界が無くなれば良い。」

雨の日

。

「…人間など…所詮…。」

少女は一人、雨の中を歩いていた。

「…ちょっと、お姉ちゃん。」

「…？」

「…？」

幼い少年は少女に話しかけてきて、傘を渡した。

「お姉ちゃん、風邪引く。」

「…なぜ…？」

「だって、母ちゃんも父ちゃんも人には優しくしないで？」

「…？」

「…うか。」

「…じゃあね。」

幼い少年は雨の中を走つて行った。

そして、少女はどこかに消えていつてしまつた。

「…雨が好きな人間はいるのだろうか…。」

1句 口音変化

「要ー もつ もと起あるー。」

ガラツー ガラツー！

女の人が部屋のカーテンを開ける。

「ん？…。」

ベッドには、少年が寝ていた。

「要ー もつ もと起きなさいー！」

「… 今何時？」

「7時45分よ。」

「… ふわあー…。」

少年は用意を始める。

「朝ー」はんできてるから。」

「ん。分かった。」

少年はあーまいな返事をする。

少年の名前は『時雨』しぐれかなめ 中学2年生。

要の中学校は学ランではなく、高校生などが着る制服でいいらしい。

「はー、要。お弁当ー。」

「ありがとな、ねえちやん。じゃあ行つてくる。」

要は口にパンをくわえて家を出た。

要はとても、マイペース。

「……。」

「うわあーんー。」

子供が道中で泣いていた。

「ん？… どうした？」

「お母さんがいなくなつたの。」

「さうか、じゃあお兄ちゃんが一緒に探してやるよ」二ノ口シ

「ありがとう!」

そして、要は子供の母親を見つけて、学校に向かう。

時刻08:10

。

「…ん？あつ」

要は道に落ちてる「ミニ」を公園の「ミニ」箱にまで入れる。

「はあ…今日も平和な日常だなあ~」

要はとても親切?というか、そう言ひつ“正義感”がある。

「あつ…遅刻するな。」

要はパンを全て食べる。

そして、いつものよう、登校する。

「ふわあ…眠い。」

「おつす!時雨!」

「ん?…澤倉?なんだ?」

「相変わらずだな。お前は。」

「??。」

「いいから、わざと行かないと遅刻するぞー!」

「知ってる。」

要は成績優秀、女子にも男子にもそこそこ人気者。先生にも頼られる事が多いが。

あまりのマイペースに結構ウザがられる事もある。

ガラツ

教室に入り、席に着く。

要の席は窓際の一番後ろの席。

「時雨君ーここ、教えてほしいの。いいかな?」
「ん?…別にいいけど。」

要は誰にでも親切で優しい。

タツ…。

「…雨が降つてない日は嫌いだ…。」

電信柱の上に立つ少女、小さな傘を広げていた。

「雨…。」

「雨がどうかしたの? 時雨君?」

「いや…。」

要は窓から外を見る。

ガラツ

「……要…!…!」

「ん?」

「バコンツ…!…

「!…?…。」

「時雨君大丈夫?」

いきなり要が少女に殴られる。

「痛ツ…。」

「あんたねー告白されてもっと言い方とか無いわけーー!」

「…呉羽?…。」

「聞け!!人の話!」

少女の名前は『 笹野呉羽』 要の幼馴染。

「何?…。」

「昨日、告白されたんでしょう。なら、断る言ひ方を考えろ……。」

「……まあ……悪かったよ。」

「……私は謝られても困るし……。」

要は素直に謝る。黒羽は頬を赤くして田をそらして言ひ。

「俺に告白しても、意味無いのに。」

「えつ？どうしてよ？」

「俺、幼い頃からずっと思つてゐる人がいるしな。」

「……？」

「えつ…………！」

クラス中、全員が驚いていた。

「？？」

「……時雨要……。」ボソッ

少女は、傘の持つところに書いてある名前を読んだ。

2句 始まりの出会い

「…匂づ。」

少女は突然電信柱から消えた。

ドクンッ！

「！？…。」

「時雨君？」

「あついや…なんでもない。」

要は少し顔色が悪かつた。

なんだ？今の違和感…。

そして、空は曇り。

やがて、雨になつた。

「雨だ、天気予報と違つ。」

「…雨…。」

ドクンッ！

「！？…。」

『…人間とは、珍しい物だ…。』

』

「…お前は誰だ！」

「…お前は誰だ！」

「…えつ？時雨君？」

「あつ…」めん。 「

要はそつと教室から出でていった。

「見つけた。」

「えつ…?…。」

要が廊下に出来る、そしたら窓から化け物が要を襲う。

「…?…。」

スツ！

「なつ…?…。」

「居ない。」

化け物は消える。

タツ

「…平氣か?…。」

「あつ…おつ。」

「…あまり、浮かれていると喰われる…。」

「喰われる?」

「…呆れる、まあいい。」

傘を持った少女は呆れた顔をする。

「お前は?誰だ?」

「…雨神。」

「つて…なんで俺雨降つてるので、ぬれてないんだ?」

「…それは私が神だから。」

「神?」

「見つけた。」

「…チツ…。」

雨神は要を抱えて、飛ぶ。

「なんだアレ！」

「あれば、”死魔”^{カク}能力を持っている人間を喰う。」

「何！？…。だけど俺には能力なんて…。」

「…ある。かつて私がお前に授けた能力。」

「はあ？」

タツ

地面に着地して、走る。

「…雨、突き刺され。」

雨神が傘を化け物に向ける。

そして、雨は氷のようになるとがる。

そして、化け物に突き刺さる。

「グワアアアアアアアア…！」

化け物から、血が大量に出てくる。

「…逃げるぞ。」

「あつ！…。」

「…人間は本当に哀れだ。」

「…。」

『お姉ちゃん、濡れちゃうよ。』

なぜだ…なぜ、歳を取つていない。

「…再生を始めたか。」

「えつ？」

化け物の傷は全て再生する。

「……せつせつ、田を見ませ！。

「…？」
俺は驚いて困った。

「我故鄉」圖書館
NO.1

兩方仁行物語附注

「アーティストの反響」

「えっ?
神だらうあんた!」

「私は、お前こ力をあたえ、

「！？○」

ドウシツ！

！」
。

要の様子がおかしかつた。

『人間、力がほしいと思わないか?』
『ほしいよ、誰かを守れるようなそんな力が。』
『なら私がやろう。また10年後その力は發揮される。』
『お姉ちゃんと出会うか分からぬよ?』
『…それもそうだな。』

「！？…雨神とであつたあの日…俺は死神になつた！」

ジヤキッ！！！

死魔は真っ二つになつて、血を流して倒れて消えた。

「やったのか？」

「…………ああ、よくやった。」

力外、
而用

雨神が突然しゃがみこむ。

「……大丈夫だ、ただ力を使いすぎただけだ……。」

「 どうか？ なら、いいけど、

「兩社は立女」たる

卷之三

「... 私に家など無いが... 今は雨が降つて いる傘。」

「あつ…これ、昔俺が…。」

要が傘を見て言つ。

גָּדָרָה וְעַמְּקָמָה בְּבֵית-הַמִּלְּקָה

「別六、氣の音の音サで。

「まあ、だけど、ありがとーー。」**ミチ**

「……いいから、さつさと帰れ。私は要の見張りをしている。」

「うわあ！ あなた！ 雨神！」

.....

要を見ると、まったく濡れていなかつた。

「……傘が無いと、自分自身じゃ いられない……。」

雨神の体が少し震えているように見える。
そして、いつしか雨神は消えていた。

「……。」

あの時も、何も無い私に、あの子供が話しかけた。

こんな化け物みたいな私に、傘を渡してくれた。

嬉しかった。

こんな人間もいるんだなって思えて……。

「要…。」

雨神はビショ濡れになりながら、一人で歩いていた。

ガラツ

「ん？…。」

5時半ちょっと前に、要の部屋の窓が開いた。

タツ…。

「…誰？」

「…雨神。」

「何！…って…何してるんだよ…。」

「…傘を返してくれないか？」

「あつ…はい。」

要は雨神に傘を返した。

「…邪魔したな。」

雨神は窓から出て行つた。

「なんだつたんだ？…。」

要はベッドに寝転がる。

タツ

「…ん？なんだ、死魔か。」

雨神の目の前には、一人の少女が居た。

「！？…。」

「ふわあ…眠い。」

「…いつてらっしゃい。」

要は、いつもよつ早く学校に向かつた。

ブーッ！！！

バイクが要をひひりつとする。

「……。」

タツ

要が軽くよけた。

「あぶねえーの。」

要はそのまま気にせず学校に向かつた。

そして、なぜか学校には、いつもより早くついた。

「……ハア……ハア……グツ……。」

タツタツ

要が階段を上がる。

「……私では倒せない……。」

ガラツ

「……？……。」

「……要……。」

「雨神！……」

要の目の前には、壁にもたれて肩から血を流してゐる雨神だった。

「雨神、何が合つた！」

「……すまない、私は……。」

「雨神……。」

「見つけたよ。雨神ちやあ～ん」一コツ

「……？……。」

「えへへへへ」一コツ

一人の少女が微笑みながら槍を投げる。

グイッ！！

ドスッ！！

「なつー？あつぶねえー。」

「…要…。」

学校半分がなくなるほどの威力だった。

「当たらなかつたかあー」ニコッ

「お前誰だ！」

「私？私は、亞隈。あくま」

「亞隈？…。」

「そう、死魔とは違つて人型で力も能力も違つ…！」ニコッ

「…要、逃げる。」

「何言つてるんだよ！お前はどうなるんだよー。」

「…あいつは、お前が勝てる相手じゃない…。」

「雨神！俺を信じてくれ。」

ドクンッ！

「！？…。」

雨神はそのまま、気を失つてしまつた。

スツ

「あれ？君が相手？」

「そうだな、俺は時雨要！」

「そつか、私は亞隈のナクル。」

要は鎧を着て、周りには無限に存在する刃が出ていた。

5句 不幸な日々？ 2

カキンッ！――！

「チツ！」

「やるねえ～、死神に力貰つてここまでできたの、君が初めてだよ」

「コツ

「余裕こいでると、後で知らんからな――！」

ドスツ！

壁に刀が刺さる。

「貰つた！！」

「：。」

「何！？」

刀がナクルに襲い掛かる。

「なんてね。」

「！？。」

「氷線氷刃！」

刀が全て凍り、粉々になつてしまつた。

「……。」

「君はおしい。だけど倒せない。」

「俺は、雨神を守るそれだけだ――――！」

「その正義を壊してあげるよ――！」

「雨の刃。」

グサツ――！――！

「！？なつ……。」

ナクルに雨の刃が刺さつた。

「雨神！――！」

「ハア……ハア……グツ……私の勝ちだな……。」

「チツ……今日は多めに見てやるよ――！」

ナクルは消えた。

「…ハア…ハア…グツ…。」

「雨神！」

要の術も解ける。

「大丈夫か？」

「…ああ…たいした」とはない…。」

「そうか。」

「…大丈夫だ…。」

雨神はよろよろ立ち上がる。

「…雨よ…幻覚。」

学校全体が元どつりになつた。

「戻つた？」

「…私の幻覚…だが、私が死ねば解ける。」

「…そうか…。」

「…学校の時間だ…私は行く。」

「雨神！」

後ろを向いたが、雨神は消えていた。

雨神…ごめん。

「…要…。」

「…ニニニニ。」

「うつそ…。」

吳羽は自分の席で寝ている要に驚いていた。

「ん?…どうした?吳羽?」

要が田を覚ます。

「どうして！－いつもなら、私が一番なのに－－！」

「…別に、気分気分。」

「何よ！－告白とかされてるからっていい気にならないでよ－－！」

呉羽は頬を赤めて強めに言つ。

「…そうだな…いい気になつてたな。ごめん。」

「…？…な、何よ！－それで許されたと思つてるの…」

「俺は強くなるんだ。雨神を守れるような男に。」

「…？…雨神？誰よそれ！－！」

「別に、呉羽に関係ないし。」

呉羽は要は聞くが要は教えてはくれなかつた。

「…私も、そろそろ、人間觀察をするか…。」

ガラツ

先生が教室に入つてくれる。

「転入生を紹介する。」

「えつ？こんな時期に？」

「入つて来い。」

ガラツ

「…ん？…なつ－－！」

ガタツ－－！

要が驚いて立ち上がる。

「うわあああ……可愛いじゃん……」

「俺タイプ！……」

男子達がとても、興奮していた。

「転入生の、雨神瑞羅さんだ。」

「……雨神瑞羅。よろしく頼む。」

雨神が要の学校に転入してきた。

「ヤバイ……超クールでカッコイイ……」

「じゃあ、雨神は、時雨の隣。」

「……分かった。」

「時雨、教えてやつてくれ。」

「あつ……おつ。」

要は動搖を隠し切れないほど、動搖していた。

カタツ

雨神が席に座る。

「おい、雨神。何してるんだよ。」ボソッ

「……人間觀察だ。要と語る方が好きだしな。」ボソッ

「……？……そつかよ……。」

要は頬を真っ赤に染めていた。

何よ……要の奴……ちやせりあれてるからつていい気に成り上がり
て……！

6句 不幸な日々？ 3

「…時雨君、私に学校案内をしてくれないか？」

「あついぜ」——「」

「…ありがとう。」

「ちょっと待った！——！」

要と雨神が教室を出ようとするが、呉羽が止める。

「ん？ どうかしたのか？」

「…呉羽？」

「俺の幼馴染でこのクラスの委員長だよ。」

「…そうなのか？」

「クラスの事聞くときは呉羽に聞くといこぜ」——「」

「…分かった。やつする。」

「ちょっと一人の話聞きなさいよーー。」

一人の仲を呉羽がさえぎる。

「なんだ？」

「…呉羽さん。」

「何？ 雨神さん？」

「…この頃妙に苛々するか？」

「えつ？ まあ、うん。それがどうした？」

「…あつ別に、何でもないぞ。時雨君、案内してくれないか？」

「了解。」

そして、二人は教室を出た。

「あの一人、仲いいよねえ。」

「出来てるんじゃない？」

「だけど、委員長いるでしょ？ 」

「二股？」

「ああ…………もづ……鬱陶しいのよ…………」
呉羽は教室で叫ぶ。

「さつき、何か見えたのか？」

「……あの呉羽という人間、死魔にとりつかれてる。」

「はあ！？」

「……早く、倒さないと、呉羽は死ぬぞ？」

「！？……駄目だ！呉羽は死なせない！必ず、俺が守つてみせる。」

タツ

「！？……」

雨神が急に右足を地面につけて、頭を下げて言つた。

「……それがあなたの覚悟なら、私は一生あなたの物になります。」

「！？……サンキュー！雨神！」二ヶ

まつたく……人間と言つ物は……。

ドクンツ！

「？！……」

「委員長？？」

「何？……苦しい……要……助けて……要……」

バタンツ

「委員長！？」

呉羽が教室で倒れた。

「…現れた。」

「急ぐぞ！…」

雨神と要は教室に戻る。

ガラッ！

「…？…。」

「はははははははは…！…楽しいわ！…」

「呉羽！…」

「ああ？…」

呉羽は血だらけだった。

そして、呉羽の周りには死体がいっぱい倒れていた。

「呉羽？…。」

「…貴様、人間ではないのか？」

「ははははは、私の名は亞隈の呉羽！…。」

「亞隈？…呉羽が？…。」

「…要、戦わないのか？」

「俺は…倒せない！」

「…貴様の覚悟はそんな物だったのか…。」

「死ねばいいわ。」

呉羽が帽子から、無数の人形を出す。

そして、人形は武器を持つて要に襲い掛かる。

「…！…！…！」

グサツ…！…！…！

「…？…。」

「…貴様は…私が…守る…うつうん、守りたい…。」

「…？…雨神…。」

ドクンッ！

「はははははははは……血だ！……」

ドスツッ！！

—
! ?
:
—

異羽が雨神の体を素手で刺す。

！？ だハッ！

雨神は血を吐した

「雨神。」

二二二

バタンツ。

11

卷之三

6

7句 守る人

雨神が！…。

「雨神！…おい！」

「ははははははは、死んじゃったー！」
「ヤッ

ドクンッ！

「！？…」
「

俺が助けてもらつた…。

ドクンッ！

俺は守れなかつた…。

ドクンッ

「…俺は…」

「…守つて…見せてくれ…」
「

「！？…雨神。」

「…貴様の…力を…」
「

「…分かつた！俺は、守る！」
「

ドクンッ！…！…！

俺に力を、誰もかもを守れるようなそんな力を俺にくれ！…！…！

「…グッ…」
「

雨神はよろよろ座り込む。

血はもう止まっていた、傷は遅いが治り始めていた。

「……やはり……貴様は……選んで正解だつたな……。」

そして、妻の田の前に止。

「！？」
「～？」
。

銀色に光る刃が出てきた。

卷之三

「奄の？」

「……そう、だから……もう何も恐れるな。」

「！？ 分がつた！！！」

黒羽は三本なかあるを出す。

「なつ！？デカツ！-！-！」

要は武器を取る、そして構える、

卷之三

かえるを炎を吐き出す。

そして、要の刃が光つた。

かえるかはいた炎が要達の目の前に来る。

「氷炎華！――！」

氷と炎が混ざり合った攻撃がかえる事吹き飛ばす。

「――？まあ、いつか。今日はここまで。バイバイ」二口ッ

呉羽は消えた。

ヨロッ！

バタンッ！

「……要！」

要は武器を消して、倒れる。

「エヘヘ、俺守れたかな？」

「……守れたよ、私を守ってくれた。」

「そつか…。ＺＺＺＺ」

そのまま要は眠ってしまった。

人間はいつも可愛いものなのだな。

タツ

—
} } }

ロリータ系の服を着て、鼻歌を歌いながら歩いてくる少女が居た。

ドキッ!!!

「！？」

少女が驚き止まる

「ううせなーお前に何がわかるーーー」の可愛い服を見ろーーー

「ん?
なんだ?
雨神?
」

一人の声に目覚める、要。

「分かった。

そして、窓を閉める要。

「圭」

「……私の契約者だ。」

マイカム

「うるさいな！女装してる男に言われたくない！」の「ド変態！」
「ド変態だと！」の俺を変態呼ばわりするとは「なんど」「つ奴」

「……こんな奴ですけど。」

「相変わらずむかつくな……」
「フン。」

二二二

ガチャツ

「ん？誰だ？その女の人は？」

「…要、気にするな。」

「…？まあ、いいけど。」

「…後、女は男だ。」

「…？マジで！」

「…零神という、私と同じ神だが、私は死神だから私のほうが強い」という事だ。

「はあ！？あたしの方が強いわよ！」

「…何、女口調にしてんだよ、てか胸ないな。」

ギクッ！

「！？…別にいいじゃない！何よ！あんたがでかいからつて！」

「…誰もそこまで言つてないが。」

「…？…何よ！胸が小さくて悪いわね！」

「…お前男だろ？胸無いか、あるかでお前は到底無いだろ？男だし、な、要。」

「えつ？…俺に振る？」

「…悪かつた、なんでもない。学校に行くぞ。」

「おう。」

「…うして、零神をおいて一人は学校に行く。」

「雨神！あんたの、契約者よりあたしの契約者の方が強いんだからね！？」

「…嘘をつくな。」

ムカツ！

「何よ！…もう…！」

そして、零神は消えた。

「なんだ？それ？」

「ああ、神は全員契約者を見つけるんだ。」

「そうなのか？」

「…私の契約者は要。契約者が強くなれば、神も強くなるといつ事だ。」

「ふ〜ん。」

「…まあ、今日の夜は、神の鼎の日だから、神の世界に行くぞ。」

「はあ！？マジで！？」

「…そうだ。お前の力を見てもうつ審査だ。」

「…？…う。」

要はとてつもなく不安な顔をする。

「…覚悟と自分自身の信頼と私を信じろ。」

「…？…わ…分かった。」

「…それでいい。」

要は頬を赤くして納得する。

「雨神に負けないでよね。」

「知ってる、俺に任せれば。」

9句 神様会議 1

「…今日は、神様会議がある。要も参加するのだ。」

「！？…俺が？」

「…そうだ。お前が参加しなければ意味が無いからな。」

「…分かった。どんなところなんだ？」

「…行つてみてからのお楽しみだ。」

「はあ、やつぱりか？」

そして、要の部屋に置いている鏡。

「鏡に何かあるのか？」

「…我は雨の死神、神様の居る世界、しんかい神界に繋がる扉よ、開け。」

バリンッ！

鏡が割れた。

「！？…。」

「…行くぞ。」

「えつ？」「

グイッ！

「うわあ！雨神！…！」

要は無理矢理雨神と共に鏡の中に入った。

つて…ヤバイ…意識が持つてかれで…。

「…おい、要。起きる。」

パチツ

「ん？…！？…アレ？俺？」

「神界の力にあてられたのだな。」

「…そつか。」

「大丈夫か？」

「平氣。」

「雨神様！」

「！？…。」

一人の人形を持った少女が雨神に抱きつく。

「お久しぶりです！」――コツ

「忌神。久しぶりだな。」

「えへへへ。」

忌神という少女はとても、雨神になついていた。

「忌神。どこ？」

「ああ、契約者が呼んでるから、もう行きますー！」――コツ

「おう、気をつけてな。」

「はい！」――コツ

忌神は契約者の元に向かつた。

「誰だ？」

「忌神、とてもいい子だけど、とても哀れな死神だ。」

「そうなんだ。」

「そろそろ、行くか。」

「おう。」

そして、雨神たちの目の前には大きな扉があった。

ガラツ

そして、扉が開いた。

「…まあ、そう緊張しなくても構わない。」

「…分かってるよ…。」

こつして、二人は扉の向こうに行つた。

「！？…。」

要達の他にいっぱい、死神や人間が居た。

「「」こんなに居るのか…。」

「…当たり前だ。死神と神様を会わせて何人居ると思つていい。」

「…」

「…」

「あら？ 雨神じゃない。」

「ん？ なんだ、貴様か。」

「何よ！ その興味なさげ！」

「女装する男には興味ない。」

「なつ… 別にあたしはね…！」

「…」

「…」

「私に何か用か？ 貴様と会つて、苛々するんだ。」

「…？」

「雨神は少し冷めた目で零神を見る。」

「…うつせな！！ 僕が何したんだよ！ 雨神のボケ！」

零神がそのまま「」かに行つた。

「いいのか？」

「構わない。どうでもいいしな。さつとと受付に行くか。」

「神界なのに、受付？」

「まあ、そう言つことだ。」

「はあ～面倒だな。」

「そう言つな。」

そして、要と雨神が受付を終わらせた。

「で、何をしたらいいんだ？」

「…まあ、時間はまだある。ちよつとは緊張を解けばいいだ。」

「分かった…。」

神界の会議… どうせ、またあのバカ神が変な企画考へてるんだろ？
な。

タツ

と人間の少年が歩いてくる。

「……。」

「…はあ…集中…。」

要は目をつぶつた。

そして、要の目の前にその少年が通りすぎた。

ドクッ！

「！？…。」

「要？…。」

「あつ…嫌なんでもない…。」

なんだ… 今の違和感と… 恐怖心は…。

「はあ、試験つて物なのか？」
「会議といつよりはな……。」

「そりか……。」

「いいから、行くぞ。」

グイッ！

雨神が要の手を引っ張る。

「うう……！」

それを見ていた零神が。

「何してんだよ……！……！」

「！？……。」

「零神。なんだ？」

「な、何で手なんか繋いでるんだよ……！」

ハツ！

「！？……。」

パツ！

雨神が急に手を離す。

「……わ、悪かつたな。」

「！？……べ、別に。」

雨神と要は頬を赤くする。

ムカツ……！

「時雨要……！」

「！？……何？」

「俺と勝負しろ……。」

「はあ……。」

「俺と、雨神をかけて勝負しろ……！」

「！？……なんで？」

「俺の契約者が成績良かつたら、雨神を一田貸してもうつかうな！」

「えつ！…何でいきなり！…」

「いいから！…。」

タツ

「…零、何してる？。」

「…？…。」

雨神達の田の前に一人の少年が現れる。

「刀真！」

「誰だ？」

「俺の契約者だ。」

「…零の契約者の、騎士刀真。」

「刀真！…この時雨要と勝負しろ！…。」

「…また、何で？。」

「雨神といちゃついて！…。」

「…嫉妬。まあ、いいけど。」

「…。」

「時雨要君…ようしづ。お互い頑張りつけ…。」

「あつ、おう！…」二コツ

刀真と要は握手をする。

「絶対負けないからな！…！」

「…じゃあ、また後で。」

「おう！…」

「…なぜ、私なんだ。」

と4人は別れた。

「それでは、神様会議を始める。」

11句 零の刀

「 まず、零神！」

「 はい。」

そして、零神と刀真が前へ出る。

「 開始！！」

そして、会議（？）というか、契約者の実力会議が開始された。まずは刀真と零神の所だった。

「 … 刀真。」

「 … 。」

零神と刀真の手に模様が出てくる。

零神は天使、刀真は悪魔の模様が出てきて光る。

「 すぐ。」

「 …まあまあだな。」

「 えつ！…」

要は雨神の言葉に驚く。

「 雨神様！」二口ツ

「 … 忌神！」

「 …ん？…」

「 … 。」ムスツ

「 私の契約者！…」二口ツ

「 そうか。私は雨神。」

「 契約者の時雨要… よろしく。」

「 私は、華無鬼羅凪かなきひなだ！ それと、男ならしゃ きっとじる……」

「 … あつはい！」

「 凧。あまりいじめないでよ。」

「分かつた。」

なぜか要は怒られた。

刀真は静かに目をつぶっていた。

「……。」

そして、扉から兵士が武器を持って刀真に襲い掛かる。

カキッ！ ジャシコッ！

「うわあ！！」

バタンッ

そして、兵士は倒れていた。

会場に居た全員が、刀を抜いた形跡がまつたく見えなかつたらしい。

スッ

そして、刀真が静かに目を開く。

ビクッ！

「！？……。」

「要？……。」

「…すげえ…。」

「はあ？」

「刀真すげえ！…！」

「！？……。」

要は突然喜んでいた。

「？！…要も強い。俺は要が憧れる。」

「！？…そつか、じゃあ俺とお前がライバルだな！」一ノ口

「…そうだな。」

12句 忌まわしい無鬼

「次、忌神。」

「はい。」

次は忌神の所だった。

「では、開始。」

「…チツ。」

「羅凪…。」

「…。」

羅凪と忌神が首にかけてあるペンダントが光る。
ドクンッ！

「！？…。」

羅凪の瞳が赤に変わり、忌神の瞳が青に変わった。
二人の瞳の色が入れ替わった。

そして、刀真と同じように扉から兵士が出てきた。

「あの二人つて、相性悪いように見えるな。」

「戻ってきたのか。零。」

「当たり前。」

「おつす。」

「おう…。」

零神と刀真が観客席に戻ってくる。

「忌神も気に入つたから、契約したんでしょう。」

「それも一理あるな。」

「…。」

「あの女人俺苦手。」

「…なぜだ？要？」

「いや……たつね……とも嫌な事を……。」

「それは災難だつたな。」

「えつー、お前冷めてるな」

要と万真は一人で話していた。

そして、羅刹は兵士に囲まれた。

羅屈。

忌神が羅正の後ろに来ていた。
みむろ

忌神が持つている人形が動く。

「人形が動いた。

「あれは、忌神の大好きな人形だ。」

國朝文

雨禰はやたら忌神の事を知っていた

100

羅凪の目つきが変わった。

シユーヌッ!!

- 1 -

要と力真が驚愕してした。

「おどろいたが、一の主到。

「只者ではない……。」

「……。」

そして、羅凪は人形の口に手を突っ込んだ。
そして、真っ赤な丸い物を取り出した。

「……。」

その丸い物は長剣になつた。

「……剣道部部長を甘くみるな！……！」
ジャキッ！！

そして、一瞬にして、兵士が全員倒れていた。

「……雑魚が。」

そして、丸い物を人形の中戻す。

「へえ～……あいつも俺のライバルだ！」
「……そうだな。」

13句 無世界の紅色

「はあ～…疲れたあ～。」

現在、休憩中。（午前の部は終了）している。）

「だけど、全員凄いなあ～。」

「…要は最後か？。」

「そう。」

「精々頑張るんだな！」

「へいへい、どーも。」

すっかり三人は仲良しになつた。

バシッ！

「！？…。」

「なんだ？」

凄い音に皆が振り向く。

「いい加減になさい！私のいう事が聞けないのかしら？」

「いたた…」ごめん、ゴメン。」二コッ

バシッ！

「そうやつて二コ二コしないでくれます？

はつきり言つて、鬱陶しいですわ。この下僕が。」

「ははははは、ごめん。」二コッ

「だから…その顔が鬱陶しいと言つてますのよーー。」

一人の扇子を持った少女がマフラーをする少女を叩こうとする。

パシッ

「！？…。」

「雨神？」

「いい加減にしろ。」

「…？…なんですか…！」

雨神が扇子をつかんで止める。

「…神が人間をいたぶって楽しいのか？」

「ええー楽しいですわよ！」

「お前の方が見てて鬱陶しいぞ。」

ムツ！

「なつ…ふざけないで…！」

「はあ、無神！」

「！？…。」

少女の動きが止まる。

「いい加減にしろ。午後の部ももう始まる。」

「零君…。」

「無神。大丈夫？」

マフラーを巻いている少女はさつき叩かれた怪我があつた。

「…おい。」

「えつ？」

羅凪が少女に話しかける。

「女は顔を傷つけるものじゃない。」

「あつ…。」

羅凪が少女にハンカチを渡す。

「ありがとう！私、書皇花芽紅しょおうかあくよろしくね」二コシ

「私は、華無鬼羅凪。よろしく頼む。」

「行きますわよ。芽紅。」

「あつうん！ハンカチありがとう。じゃあね」二コシ

そして、二人は会場に向かつた。

「雨神様。私達もそろそろ。」

「そうだな。」

「行くか。」

「…うん。」

「知つている。」

「はいはい。」

そして、皆会場に向かう。

そして午後の部は始まり。

「無神。前へ。では、開始！！」

「下僕なんだから、私は力を貸しませんわ。」

「知つてるよ。じゃあさ。私のために膝まずいてくれる？」

「なつ！この私になんてことを。」

「そんじゃあ行くよ！！」

「本当に、使えない下僕ですわ。」ボソッ

そして、無神が扇子を広げる。

「…隕石～唐突～落ちてくる。」

そして、上から巨大な隕石が降つてくる。

「なつ！！！」

「マジか！」

「言靈使いか…。」

観客席の階には神が張つた結界があるから攻撃は当たらない。

「私を甘く見ましたわね。」

扇子で巨大隕石を吹き飛ばす。

「あれれ？まあ、本来の力はこっちか。」

そして、辺りの風景が変わった。

剣、刃、弓矢、刀、などが刺さっている場所になった。

「これがいい。」

芽紅が取つたのはたまたま落ちていたチエインソー。

「なつ……神でも死にますわよ……」

「ははははは、そつかあ～」二口ヶ

「！？…。」

芽紅の姿が一瞬にして消えた。

スツ！

「！？…。」

「私が買つたよ。約束。一週間私のいう事聞く。」二口ヶ

「はあ～…分かりましたわ。」

不思議な二人が仲間になるとはまだ、誰も知らなかつた。

14句 時の雨

「次は雨神様ですか?」

「私で最後か。」

「頑張つて下れー」「コラ

「おう。」

そして、要と雨神は会場のど真ん中に来る。

「うわあ…緊張してきた。」

「全員、にんじんとでも思つておけ。」

「なつ…つて古い。」

「そうか。」

そして、雨神達は準備をする。

「開始!」

そして、開始した。

「…炎華氷蒼斬！」

えんかひょうそうざん

審査会場だけが地面が凍つた。
そして、上から炎が降つて来る。
兵士全員がダウンしていた。

「帰りづぜー兩神ーー」ニコツ

「そうだな。」

15句 白い月 黒い月

神様会議は無事終わり。

契約者たちは皆帰宅した。

そして、普段どつりの日常に戻る事だった。

タツタツ。

「……。」

真夜中一人で歩いている忌神。

「誰？」

「……。」

「……違うのかな？まあ、いつか。」

電柱の下に来る。忌神。

そして、突然忌神の影が動き出す。

「……。」

影が実体化する。

「本当は、人間が大嫌い。」

「……。」

突然、忌神の声がつぶやく。

忌神の動きが止まる。

「人間なんて、死ねばいいのに。」

「……。」

「だから雨神様と居る事にした。」

「……違う！」

「その人形も人間の魂が入っているのでしょうか？」

「……。」

忌神は耳を塞ぐ。

【嫌だ！諦めたくない！私のたつた一人の大切な人なんだもん！…】

ドクンッ！

「！？…。」

「違うの？忌神は自分自身の心を閉ざしているのね。」

「…。」

「その人形も人間の魂が入っているけど一度も喋らない。」

「！？…違う！」

「違う？じやあ何？」

「私は…私は…。」

「じゃあ、死ねばいいじゃない。」

「！？…。」

忌神は地面に座り込む。

「契約者を捨てて。」

「！？…。」

「あなたに契約者なんて要らない。」

「…違う！」

「一体何が違うのよ…！…！…！」

「！？…。」

「大切な人より、契約者を選ぶ？」

「！？…。」

【ん？お前大丈夫か？】

【えつ？…。】

【幼い子がこんな雨の中で。】

【…大丈夫…。】

【そんなわけないだろ？…私の家に来なさい…。】

【…？…。】

「……。」

羅凪を苦しめるへりになら…。

「契約を破棄しなさい。」

「…嫌！私は契約を破棄しない！…」

「やう、なら死んで。」

グサッ！…！

「…？…羅凪…。」

バタンッ

「やつぱり、収穫なしかあ。」

「…羅…凪…。」

16句 神だけを狙う事件 1

「忌神！」

現在、雨神、零神、要、刀真、羅凪は神様専用の病院に来ていた。
昨日の夜、忌神が血まみれで道端に倒れていたらしい。

「忌神！起きろ！…」

忌神は重傷の怪我を負い目を覚ますかはまだ不明らしい。

「…。」

羅凪は不安な顔半分に悲しい顔をしていた。

「…だが、妙だな。」

「何がだ？」

「…零神。」

「知ってる。今は神だけを狙う奴が居るんだろう？？」

「…嫌な気配はしていたが。まさかな。」

「そうだな。」

「…まあ、忌神は死はない。」

「…？」

「契約者が信じていれば、いつかは目を覚ます。」

「…？…信じていれば…。」

「行くぞ。要。」

「あつ！おい！雨神！！」

雨神と要は病室を出て行つた。

「要。私は人間の姿になる。」

この事件が治まらないと。自由に外も歩けないからな。

「…？…」

そして雨神は人間の姿に戻る。

普段学校に行く姿だった。

「あつ… そだ。」

病室を開ける。

「零神。」

「ん?」

「お前、この事件中は女装やめろよ。」

「…?… なんでだよ…?…」

「いいから、事件が終わったら何でもこう事聞いてやる。」

「!?… 分かつたよ。刀真。服屋行くぞ。」

「はいはい。」

そして、刀真と零神は病院から消える。

「お前はどうする?」

「…ここに居る。忌神が心配だから。」

「そうか。ならいいが。」

そして、雨神と要も病院から消えた。

「…忌神… 誰なんだ… お前をこんな風にしたのは…。」

ポタンッ

「で、どうするんだ? お前家ないだろ?」
「ある。」
「えつ? いつの間に?」
「要の家。」
「?…? はあ…?」

「零神は刀真の家に住んでるらしい。なら、私も…。」

「いやいや！ あいつら駄だらつ！ お前女！ ！」

「別に良いだろ？私の事を女と思つね。」

「異議がござります。」

無理が無い

要と雨禪は周囲から見たら彼女 徒田の關係は見えて

「真刀どれがいいと思う?」

「1回、試着してみたらどうだ？」

「それもそうだなー。」——「」

零神は1回刀真の家に行き、

この二人も周りからはただ仲良しの一人が服を買つてゐるようにして見えない。

女性には人気があるが。

そして。

「無神。」この頃神を狙う事件が勃発してゐるから。あまり出歩かない

「ほ、う、が、あ、～」

「いいじゃ ないの。私の勝手ですわ。」

「はあ……先う。次組われても知らないからねえ——

「フン。私が負けるはずないですね。

そして、芽紅と無神は離れてしまった。

「次なる、
目標：無神。」
ニッ

17句 神だけを狙う事件 2

「本当に鬱陶しい下僕ですわ。」
無神は一人で歩いていた。

「…！」

強い風が吹く。

「見つけた。」

「ん？ なんですか？ あなたは。」

「死んでくれないか？。」

「はあ？ あなたこの私の何を言つてますの？。」

「…。」

「私に近づかないで！ 本当に汚い！

人間の分際で…私に…！？」

スツ

誰かが刃物を無神に向ける。

「…いい加減になさい！！」

無神が扇子を振る。

だが簡単によけてしまつ。

「…？」

「…影操…」

「…影操…」

「…影操…」

無神の周りが真つ暗になる。
そして、自分の影が出てくる。

「本当は、こんな事したつて誰も振り向いてくれないってわかつて
るのでしよう？」

「…？」

「…？」

「本当は、こんな事したつて誰も振り向いてくれないってわかつて

「なのに、エーッヒヒヒ、あなたは分からぬのかシリ?」

「…?…嫌…。」

影が無神に話し始める。

無神の体は震えていた。

「あなたは自分自身が悪くないと思つてゐる。

だけど、違うわ。本当はあんた自身が悪いと思つてゐるわ。

それが哀れなのよ…。」

「…?…。」

【あなた、何してゐるのかシリ?】

【ん?…えへへ。】「口シ

【ボロボロじやないの。】

【大丈夫です…。】

【私と来なさい。助けてあげるから。】

【ありがと…。】

「…?…。」

カタンツ

無神は扇子を落とす。

「…私は…。」

「死ねばいい。」
「グサツ！！！」

「ーー?ーー。」
「...5人目。」

「...芽紅...。」

バタツ

地面に膝が着く。

「ーー?ーー...グヘエーーー。」

血を吐く。

腹を刺されて腹からは血が大量に出ていた。

「...。」

ポタンツ

「...「」めん...なさい...芽...。」

バタンツ

無神は倒れてしまった。

「ははははは...次だ。次ーー。」

「……。」

芽紅は顔を下に向けていた。
とても暗かつた。

無神は意識がまだ戻らないらしい。
手口は忌神と一緒に。

「神だけを狙う事件、身内がこんなに狙われるとはな。
次は誰が狙われるか不明だぞ。」

「知っている。」

「……。」

「つて！…誰だよ！お前！…」

要と雨神が反応する。

要の家には刀真と見知らぬ少年が来ていた。

「俺だ！…零神だ！…雨神、お前みたことあるだろ？が…！…
「いちいち、覚えているわけが無いだろ？。」

「なんだよ！…」

「…はあ…挑発に乗るバカ。」

「…？…刀真！お前！…」

「…はいはい。」

「で。」

要が話題を広げる。

「事件だけど…。」

「次は誰が狙われるか。」

「それは…。」

「分かった。」

「はあ！？」

「私が劣りにならう。」

「雨神！それは……。」

「大丈夫だ。私は強い。」

「そう言つ問題じや。」

「私を信じろ！……。」

「！？ 分かった。」

「ありがとう。」

要は雨神が劣りの事を納得する。

「……。」

「私が心配か？」

「当たり前だ！……。」

「契約者だからな。」

「！…もう！…零！…！」

「なんだよ！？」

「お前も劣りになれ……。」

「はあ！？」

「俺と刀真で尾行するから……。」

「……。」

零神は雨神を見る。

「はあ！…分かった。」

「おつしゅや！？」

「じゃあ、今日の夜実行するぞ！……。」

19句 神だけを狙う事件 4

そして、夜。

雨神と零神は神の姿をして平然に一人で歩いていた。
要と刀真はそんな二人を尾行する。

「なあ……雨神。」

「なんだ？」

「お前は俺の事どう思つてる?」

「……ただの知り合い。」

「……そつか。」

「なんだ?自分が聞いたくせにしょぼくれるな。」

「悪かつたな!!」

「へへへへへ。」

雨神と零神の後ろから不気味な声が響く。

「!?!?」

一人は振り返る。

「やつとか。」

「雨神、足引っ張るなよ。」

「それは、零神もだろうが!?!?」

一人の影が動く。

「なつ!?!?」

「マジかよ!?!?」

影が具現化する。

本当は自分自身が怖いんだろう?雨神。

「！？…。」

私は知つてゐる。正氣を失つた自分が怖くてショウガナイ。

「！？…違う！」

「雨神！挑発に乗るな！！」

じゃあ、何でそんなに恐れた顔で否定するんだ？

「！？…。」

自分自身が怖いなら、死んじやえればいいだろ？

「…違う…私は…。」

愛されない死神。

「！？…。」

そうだ、誰も私を愛さない。だけば違つた。
愛されているけれど、私がそれを拒んでいる。

それが真実だと、最近気づいた。

何で、愛情といつもの拒むの？雨神？

「…呼ぶな…。」

何？雨神？はつきりしろよ。

「…私の名前を…呼ぶな！…。」

ジャキッ！

「！？…。」

雨神は傘で自分自身の影を刺した。

「グヘ…。」

「雨神…。」

雨神は血を吐いた。

「…とか…自分自身の影だから…私に喰ひりののか…チッならー。」
ジャキッ！グサッ…。」

「雨神…やめる…。」

雨神は自分の影を切り刻む、同時に自分自身は血だらけになる。

「痛い！ 痛い！」

「黙れ！ ！！！」

「雨神」。

「！？……」

雨神の動きが止まった。

「……雨神……守れなくて……め……」

「……呼ぶな……！」

カキンッ！

「！？……」

「雨神、もうやめろ。」

要が雨神を止めた。

要は剣を出して雨神の傘を止めたのだった。

「雨神、これ以上自分自身を傷つけるな！」

「！？……さい……」

「雨神？」

「……呼ぶな……」

「雨神……」

「呼ぶな……私の名前を呼ぶな……！」

「！？……」

雨神は要を傘で吹き飛ばす。

「……要。」

「俺は、大丈夫だ。だけど雨神が。」

「零。」

「分かってるけど、俺も影が。」

「お前の影は何も言わないんだな。」

「つっせな！俺は零だからな！」

「だつせ。」

「なつ！！」

いしから、
雨神を止めるぞ！」

…愛してくれ

卷之三

たけど無理だNIIで兩親自身が相んでたの無理に決まっている

そして、
影は変形する。

！」
。

カタツ

雨神は傘を落とした。

雨神、会いたかったよ——コツ

一
永久
。

ポタツ

20句 忘れられない人 1

『雨神、大丈夫?』

「永久。」

「雨神、会えてうれしいよ。」

「永久。」

「変わらないね、雨神は。」

「!?」

「あの頃から、元気にしてた?」

「永久!私は。」

「グサッ!!」

「!?」

「ごめん、雨神。俺の命令は君を殺すことなんだよ。」

「...永久...」

「バタンッ」

「ごめん。だけど、殺さないと。」

「雨神は倒れる。」

「...」

「永久。」

「もう、死ぬの?」

「私は。」

雨神は立ち上がる。

大量の血を流してでも。

雨神は俺の事好きだった？

「……。」

雨神は俺の事愛していた？

「……。」

雨神、俺は君の事好きだった。

「……。」

永久の影は話しかけているが、雨神は黙り込んでいた。

！？…

雨神は永久の持っている刃物を自分の首に付けつける。

「雨神！？！」

要は駆け寄ろうとするが、何かの結界で入れない。

「なんだよ！これ！雨神！」

「殺したければ、殺せばいい！」

雨神は血が大量に出ているのにも関わらず、自分自身を犠牲にする。
なつ！…。

「私の事を憎いお前なら、私を殺せるはずだ！」「…

！？…。

「なんだ？私に情でも沸いたか？」

「そんな事あるわけがないだろう！…

「なら、さつさと殺せ。私は自由になりたい。

もう、こんなくだらない世界に居るのはもつといやだ。」「…

なら殺してやる！…！

永久は刺そうとするが…。

！？…

雨神を殺そうとしているのに、手が動かない。

なぜだ！！

「出来ないのか？人を殺す事はこうするんだーー！」

グサツ！！

雨神は永久の刃物を持っている手を引き、自分の大量出血している傷に刺す。

！？…

「…う…グヘエ…！…！」

雨神…。

「…帰るう…永久…。」

！？…。

「私に…とつて…永久は…忘れられない人…だから。」

バタンッ

「雨神！！！」

雨神が倒れた。

傷からは大量の血が流れる。

「…永久…。」

ドクンッ！！

『…私は一人では無いのですね』二コツ

「……。」

私の……人間の時の記憶?……。

21句 忘れられない人 2

「雨神！」

要が雨神に駆け寄る。

「…眠つてるだけ？…。」

「雨神！大丈夫か？？」

零神の影はまだ消えていなかつた。

お前は、どうして自分の意思を隠すんだ？
そして、やつと影が喋つた。

「別に、俺。弱虫だし。だからあいつが氣づくまで俺もまとうかなかつてさ」

どうして？あんな過去を持つてゐるくせに。

「…？…。そうだな…別に。」

どうしてだ！…どうしてだ！…どうしてだ！…どうしてだ！…

「…？…。」

お前はまだ、思い出すんだろう？あの日の事を…！…！

「…？…。」

あの日…の事…。

真つ赤な空に真つ赤な水に真つ赤な……人間。

「俺は…。」

お前が悪い。

「だから、俺は。あいつ等のために償いながら生きて……！」
それは、償いとは言わない。

「！？…。」

人は必ず、死ぬ。それだけの事だろ？？

「違う！…！…！」

何が違う？一緒に事だよ？そこで死んだら人生が終わる。それだけの事。

「違う！違う！俺は…違う！」

バカじゃないの？お前一人生きても、誰も悲しまない！誰も喜ばない！！

「！？…それでもいい！！俺はそれでよかつた！！」

なら、死ね！！

「俺は、死なない！生きて償い続ける…！」

「ならさ、僕が殺してあげようかはははは。」——
グサツ！…！

「えつ？…。」

「！？…。」

「零神から真っ赤なものが飛び散る。

「…零…。」

刀真の所に零神の血が流れてくる。

「！？…。」

ドクンッ！…！

「…刀真…。」

刀真の周りに雷が走る。

「刀真。」

零神は手を伸ばすが、そのまま意識を失ってしまった。

22句 忘れられない人 3

刀真…悪い。俺はとても弱い。

神として失格な存在なんだ…。

だけど…お前はあの時…。

「…。」

「！？…何？」

「…別に。ただ…。」

「ん？ なんだ？」

「…なんでない。」

「ん？ お前、人間のくせに人間の匂いがあんまりしないな。」

「！？ 別に、どうでもいいことだ。」

「お前、変な奴だな。」

「…そう言つあんたもな。」

それが俺達の出会いだった。

零神は少し目を開ける。

「…うわあああああああ…！」

「…刀…真？…。」

「ん？…。」

「…刀…真？…。」

何で、あんなに……。

「う……」「

零神は立ち上がるうとする。
だが、意識が朦朧としていた。

「……グツ……」「

傷口から血がボタボタたれる。
「……刀真……」「

零神は立ち上がる。

傷口は手で押さえていた。

「零神！」

「要……これはどうこう……事だ？」

「俺にも分からぬ……！……」

「はあ？……」「

零神はゆっくり歩く。

だが、血を出しすぎて思うように動かない。

「……蒼枯灰光……」「

零神が刀真に向けて放つ。

ドクンッ……

「！？……」「

「……ハア……」「

零神の傷は跡形もなく消えて行く。

零神が放った光のおかげで、いつしか刀真の雷は消えていた。
刀真は正気に戻っていた。

「おい！刀真！……！」

「ゴンッ！……

「…？…。」

零神は刀真の頭を殴つた。

「お前、冗談もほどほどにしろよ！…！」

あんな自分でも制御できない雷なんか、使うな…！

俺は、お前より強い…死ぬ事なんてないんだからな…！」

「？！…分かった。」

刀真はきょとんとした顔をうなずいた。

「なら、いいが。」

「…」めん。零。」

「別に、俺は…。」

「つて、お前らだけ、解決するな…！零神、雨神も治せよ…！」

「ああ、へいへい。」

「…要もお節介。」

「つるわー。」

「やつぱつ、まだだ。雨神。俺の愛しの姫。」一ヶ

23句 再びあの日 1

『やめてください……どうかこの子だけはおやめください……』
母さん……

『お願いします……私のたつた一人の娘なんですよ……』
母さん……泣かないで。

『神のいけにえになんてしないでください……』
母さん……私は……。

『僕と来る?。』

そしたら、母さんは泣かない?

『うん、僕が保障するよ』二口ツ

なら、行く。お兄ちゃんは優しそうだから

『そつか』二口ツ

信じていた。

あの頃は、他人に警戒心などなかつた。
ただ、母さんを泣かせたくなかつた。
それだけの事だった。

お兄ちゃん……何してるの?ねえ、離して……
『じめん、だけどこれが僕の望みなんだよ!

雨神という神になつてよ。』

いや……いや……母さん……母さん……!

「……。」「
「雨神、起きたのか?」

「要…。」

「大丈夫か?」

「あ…うん。」

「そつか、俺もう帰るけど。」

「うん、ゆつくり休め。」

「何か合つたら、呼べよ」 二コツ

「分かつた…ありがと。」

要は帰つた。

雨神はあの後、神専用の病院に運ばれた。

雨神は一人病室に居た。

あたりは真つ暗で病院は静かだった。

「で、私に何か用か?」

「僕の愛しの姫に会いに来たんだよ」 二コツ

「私はもう、貴様を信じない。」

「酷いなあ…、眞実を伝えに来たよ」 二コツ

「眞実だと?」

「君は人間と関わつてはいけない。」

「!?…」

「そうするだけで、もう世界は全て壊れ始める。」

「だまされない!! 私は…。」

「僕だけが姫に教える。ねえ、桜乃。」

「!?…呼ぶな!! 私をその名で。」

「帰ろう。僕の所に帰つておいで」 二コツ

「断る。」

「桜乃。」

「ドクンツ!!」

『桜乃。 ありがとう』 二コツ

ゆふさん。

「帰るつよ。 桜乃。」

「…断る…」

「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2926z/>

雨の死神

2012年1月13日23時03分発行